GUSTAVE FLAUBERT
GUY DE MAUPASSANT

MADAME BOVARY
UNE VIE

ボヴァリイ夫人・女の一生

フロベール
モーパッサン
生島遼一
新庄嘉章
譯

新版世界文學全集
13

新潮社版

新版世界文学全集 13

ボヴァリー夫人・女の一生

昭和三十三年十一月二十六日　印刷
昭和三十三年十一月三十日　発行

定価　参百五拾円
地方売価　参百六拾円

訳者　生島遼一
　　新庄嘉章

発行者　東京都新宿区矢来町七一
　　佐藤義夫

発行所　東京都新宿区矢来町七一
　　株式会社　新潮社
　　電話東京(34)七一一一～九番
　　振替東京　八〇八番

乱丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷　東光印刷株式会社
製本　神田　加藤製本所

© Printed in Japan

解説

『ボヴァリー夫人』(1857)

ギュスターヴ・フロベール Gustave Flaubert (1821-1890) は一八二一年十二月、北仏のルアン市 Rouen に生れた。父は市立病院の外科部長をつとめ、当時一家は病院の一隅に住んでいた。父フロベール博士は篤実な人物で、また厳正な科学精神のもちぬしだった。いい古されたことであるが、この小説でエマ・ボヴァリーの臨終のときによばれて駆けつけるラリヴィエール博士にはこの父の風貌がうつされているとされている。

こういう科学者を父にもったことと、少年時代を病院の一隅ですごしたことは、ギュスターヴの上につよい影響をあたえたことと考えられる。幼いときに妹と二人で、死体解剖室をこっそりのぞきこんだ場合の印象などを彼は後に語っている。

ギュスターヴ・フロベールは、肖像を見ると、顔といい体格といい、堂々とした美丈夫であるが、はやくから神経性の痼疾(テンカンに類似する病気だったという)におかされていて、そういう発作が起ってからは、家族内では特別あつかいにされていたらしい。自分でも、普通人として社会に出ることを断念し、もっぱら書斎人として読書と創作の生活に一生をすごす決心をし、このことをだいたい堅くまもった。(後にはルアン郊外のクロワッセに住む。「クロワッセの隠者」などと呼ばれた)この点、やはり病身だった後のマルセル・プルーストの生活態度とよく比較される。

少年時代から、その手紙や習作風の書きものにあらわれているところ、人間生活の愚劣さにたいする敏感さ、

厭世主義的思想が顕著である。尨大な書簡集の冒頭には、正月元旦というものばかばかしさを痛烈に笑った十六歳のときの手紙がのっている。こういう傾向をさらに上塗りしたのは、この文学的早熟児に少なからず影響した、当時一八三〇年前後に流行したロマンチシスム文学の憂鬱な感情であった。シャトーブリアン、ユゴー、ミュッセなどを耽読した。特に注目すべきは、諸外国との文学交流が活発だった当時誰しもそうだったのであるが、セルバンテス、シェイクスピア、バイロン、ゲーテ等を愛読したことだ。このことは、『ボヴァリー夫人』の作者をたんなる風俗小説家たらしめず、その写実的作品に人生観文学的な幅をもたせることになった一理由かと、私には思われる。ずいぶん早熟で、はやくから書いた。初期作品とよばれている書きものはかなり多量にあり、その中には『狂人の告白』とか、初稿『感情教育』のようなかなり重要な作品もふくまれている。

いよいよ作家としての自信をもち、世間に発表する第一作にするつもりで書いたのが『聖アントワーヌの誘惑』の第一稿（これは今日の決定稿になるまでに幾度も書き改めた）であった。これには、若いフロベールが見て非常に感動したブリューゲルの絵や人形芝居が発想の動機をあたえたといわれ、またエドガール・キネ作の『さまよえるユダヤ人』やゲーテの『ファウスト』の影響下に書かれたもので、隠者アントワーヌの幻想としてさまざまの奇怪な誘惑があらわれることをロマンチック趣味の幻想劇風にあつかった作品である。発表する前に、友人のマクシム・デュカンとルイ・ブゥイエを家によび、その前で朗読して批評をもとめた逸話は有名である。このときの批評は非常に峻厳なものであって、二人の友はこのような抒情的な作品は火にくべてしまって、もう語るまい、作者はもっと写実的な、たとえばバルザックの『従妹ベット』のような作品を書くべきだ、ときびしく結論した。落胆しているフロベールに、ブゥイエが「たとえば、ドラマールの一件を書いては？」と提案したという話までつたわっている。とにかく、このドラマール事件が『ボヴァリー夫人』の原型になったことはまちがいない。

この朗読逸話の直後、『聖アントワーヌ』発表を思いきったフロベールは、デュカンとともに近東方面の旅行に出かける。そして帰国後いよいよ創作準備をはじめ、問題のドラマール事件の起ったルアン近郊のリーという

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

村に出かけて実地調査を行い、一九五一年九月の某日から執筆を開始する。完成したのは五六年四月三十日と考えられているから、約五年に近い日数を要したわけだ。テーマにとられた出来事というのは、リーに住むドラマール医師の妻デルフィーヌがさいしょはラ・ユシェット荘の所有者と姦通し、つぎに公証人見習の若い男と関係し、負債にいきづまって毒薬自殺したという、大体この小説どおりの事件であった。（今日、リーを訪れると薬剤師の家や「金獅子」館が観光物になっている）制作経過およびその苦心を見るにはフロベール書簡集のさいしょの二巻につけばいい。一時彼の愛人だった女流詩人ルイズ・コレおよびルイ・ブゥイエにあてた手紙に日を追って、くわしく、劇的に語られている。フロベールは、執筆はじめには、このようなプロザイックな平凡な主題は自分には向かず、何度も放棄したい誘惑にかられること、愚劣な日常的な詳細を美しい芸術的な文体で生かすという逆説的な労苦がどんなに心身をいためつけるかを、切々とうったえている。しかしこのような嘆息をそのままに受けとるのは単純すぎるので、批評家ティボーデのいうように、終日もえさかった情熱が疲労とともに鬱血して深夜の石炭のつきたストーヴのような嘆きをあげていると見るべきであろう。フロベールの気質や感情から考えても、第一動は壮大な歴史的テーマで書くとか、告白的な抒情的な内容を美しい詩的比喩をつかってつづるといったことにさそわれやすいが、第二動ではかならずそれに逆行して、批判的な、しんらつな、または科学的実証的な――つまり散文的な発想に行くのが常なのだ。『ボヴァリー夫人』のような作品を、自分の抒情癖を抑制しつつ書くということは、作家としての道をひらくため当然の運命で、十分そのことを自覚してやっていたにちがいない。

この小説は、こうして、一八五六年十月一日号からデュカンが編集長だった『パリ評論』に連続掲載された。デュカンは検閲をおそれて、たびたびフロベールに削除や訂正を申しこんで彼を怒らせた。ついにこの心配が事実となって、有名な訴訟をひきおこしたことも周知である。翌年二月、宗教侮辱、風俗壊乱のかどでピナール検事の峻厳な論告をうけたが、セナール弁護士の熱心で公正な弁論によって勝訴となり、四月にはじめて単行本として出版された。今日考えると隔世の感があるが、この訴訟は文芸作品にたいする検閲史上に、いつまでも語り

さとなるべき挿話である。

『ボヴァリー夫人』(Madame Bovary) はおそらく、十九世紀ヨーロッパ小説中、もっともよく読まれ、また問題にもされた作品であろう。あまりにも、といいたいくらいだ。これはどういうことであるか。まず、この小説によって十九世紀初期から写実主義の線に沿って進歩しつつあった近代小説が技術的に完成されたということを世人にはっきり示したということである。今日のわれわれから見れば、あまりにも作者が自信をもちすぎる絵画的描写法や、作者が厳格に実行しようとしたいわゆる没主観主義といったものが、古い十九世紀的なやりかたのように感じられ、反撥もする。しかしこういう手法は以後五十年にわたって実作上の模範になったのだ。『ボヴァリー夫人』と、同じ作者が後に書く『感情教育』はそういう意味において長年にわたるお手本の役をした。今日、二十世紀文学の立場から十九世紀小説の技法を吟味するとき、こういう典型作品がいろいろ批判の槍玉にあがることがあるにせよ、今日でもなお多くの小説家には実作上のお手本になっている部分が多いだろうと、私は想像する。写実主義の文芸運動はこの作品のあらわれる以前に、すでにシャンフルーリとかデュランティーといった作家達によって行われつつあった。たとえばデュランティーの書いた小説などにはかなり見るべきものがある。しかし、人物の心理解剖の深さ、絵画的描写の巧緻、ドラマチックな構成の確かさ、こういうもののすぐれた綜合により読者に新しい文学として、はじめてなっとくできる作品がこの『ボヴァリー夫人』だった。

つぎに、エマのような結婚した女の家庭的な不幸を小説化するということが、近代のブルジョワ社会でのぜひ書かれねばならぬ、重要なテーマだったことがみのがせない。この後、『女の一生』型の小説が続々とあらわれることから考えても、このことが理解できる。しかも、この作品の魅力の一つは、後にいうように、モーパッサンの『女の一生』その他、この後の自然主義文学系の小説では、たいていヒロインが環境のわるさにおしひしがれて行く受身一方のかたちで書かれているのだが、『ボヴァリー夫人』のヒロインの生きかたには若干でも抵抗

があり、そこで物語はドラマチックになっている。エマは虚栄心がつよく、気まぐれで、愚かしい女であるが、一つ凡庸でないところは、少女時代にえがいた美しい夢にじつに執拗に固執していることだ。夫への不満、現実生活の平凡さにたいする焦燥のおこるたび、いつももどって行くのはそこである。これがまちがいのもととはなるが、彼女の生き方に弾力をあたえているのも事実なのだ。恋愛の場合にも、相手がけっして理想にかなった男でないと知りつつ、自己の錯覚にしがみつこうとする意力はときには悲壮である。最後の破局がきて、以前の恋人ロドルフを訪ね、そのほかの誰かれを歴訪して、足は地につかず心もそぞろになって帰り、薬剤師の家に入るまでの直線経路はいつ読んでみても、劇的な迫力をもっている。魂全部を宿命に投げつけている感じである。

さきに、フロベールが若いときからシェイクスピアやゲーテや、特にセルバンテスなどの人生観文学的な作品を愛読したことをいったが、このことはフロベールの全作品にやはりそれを単なる風俗描写小説におわらせず、もっと人生観的文学らしき特徴をあたえていることの一因であろうかと、私は推測している。たしかにエマ・ボヴァリーの悲劇は《フランスの百もの村で生き、苦しみ、泣いた》女の非常に現実的な物語であるに相違ない。が、同時にそれは人間一般の《夢と現実の不釣合》をこういうかたちで描こうとしたという感じでうったえてくることもさまたげない。アルベール・ティボーデがこれを『ドン・キホーテ』や『ファウスト』に比較してその型の文学とするのも無理ではない。

ティボーデは大へんりっぱな『フロベール研究』を書いているが、その中で特に、この作家の《双眼的視覚》ということを説いているのは同感できる。フロベールは少年時代から一生を通じて二つの相反した気質をもっていた。一方では詩的なものに人一倍敏感であり、また他方では人生諸般に滑稽（グロテスク）を鋭くかぎつけ、これを楽しむ異常な感覚をもっていた。日頃もっとも愛好したものは喜劇的なものと詩的なものの融合であった。そういう融合がもっとも芸術的に行われているものとして、彼は『ドン・キホーテ』を《書物の中の書物》と呼んで愛読していた。また「悲しいグロテスク（滑稽）」というのは彼の口癖のようになっている言葉だった。

「悲しいグロテスクは私にとって何ともいえない魅力がある。私の道化じみていたましい天性の欲求にぴったりとあう。滑稽は私を笑わせずに、しみじみと夢想させる。私はそれのあるところで嗅ぎつける。私も世間の誰もみな、それを見つけているのだ。だから、私はこれを解剖するのが好きだ。おもしろい研究だ。かなり真面目な性格でありながら、私は自分をまじめに考えることができないのは、自分を大へん滑稽に感じるからなのだ。この滑稽は芝居の滑稽のように相対的のものではなくて、人間の生活自体に本質的なおかしさで、もっとも単純な行為、もっとも普通な動作からもかならずにじみ出ているものである。たとえば、私はひげを剃るたびに笑わずにおれない。それほどばかげて感じられるのだ」

人生がフロベールにおかしく見えるのは、それを機械的な動作の形相として見るからである。ひげを剃るのがばからしくて滑稽だというのは、それが毎日の機械的な動作だからだ。一生を通じて、ゲーテやバイロンを愛し、抒情的な感受性にめぐまれていながら、一方ではそういう滑稽への感覚も病的に鋭かった。こういう二つの感受性が交互にあらわれるのでなく、いつも同時に存在する。詩的なものの中に滑稽を見、滑稽の中に詩を見る。ティボーデはこういう感覚をフロベールの《双眼的視覚》と呼んだ。そして、これをこの人の芸術の原理とした。ものを見るのに両の目ですることによって立体的に見える。フロベールの双眼視覚は彼のえがく人生絵図を立体的に浮彫りにしているというのだ。とにかく、『ボヴァリー夫人』の読者はこういう二つの視覚のことを頭において読まれることをおすすめする。詩的な抒情的なものを読もうとする眼には、美しい叙景、洗練された感覚描写、女主人公のやさしい感情のうごき、そういうものがまずうつる。そういう眼鏡をしばらく机上において、滑稽を見る片目でこれを見れば、オメーやブルニジアンの笑うべき戯画ばかりでなく、ヴォルテールのもっとも皮肉なコントにもまさるしんらつな、喜劇的な人生の観察がいたるところにうかびあがるであろう。

アンドレ・ジィドであったと思うが、『ボヴァリー夫人』は、すべての文学愛好者にとって初恋のような追憶をのこす作品だ、といっていた。新しい文学観や技法からいえば、すでにいろいろ古いと思われる書き方が目立

ってきた。しかし、こうした意識的に主観をころそうとした絵画的文学のテクニックの是非はとにかく、たとえば、シャルルがある夏の午後ルオー家を訪ねて、娘時代のエマがあらわな肩に美しい汗の玉をうかべて縫物をしている場面とか、同じころ雪解のしずくを耳に聞きながら日傘の下でほほえむ白いエマの顔がうかんで見えるところ、または約束をやぶってよこした冷たいロドルフの手紙をひっつかんで納屋にかけ上り、窓の外の日中のクラクラする光に倒れそうになってこらえている姿など、一度読んだ者には一生印象にあざやかに刻まれるていのものをもっている。私なども、女主人公が新婚直後にこれが幸福というものか、といぶかしがりつつメランコリーに沈むあたりの数節の文章はほとんどその快いリズムで暗記していたものである。

『女の一生』(1883)

ギ・ド・モーパッサン Guy de Maupassant (1850-1900) はフロベールと同郷人で、一八五〇年八月五日、ノルマンディーのディエップに近いミロメニルの館(やかた)で生れた。(この出生地については異説がある) モーパッサンとフロベールの師弟関係のことはよく知られている。『女の一生』の作者の母であるロール・ルポワットヴァンは少女時代にフロベールの遊び友達の一人であったし、特に、彼女の兄アルフレッドは『ボヴァリー夫人』の作者が誰よりも敬愛していた年長の親友だった。こういういきさつから、並々でない親愛感をいだいていたフロベールはこの若い作家の才能をもっとも早く見ぬき、愛し、育てた人なのである。『脂肪の魂』を激賞し、「こういう作品を四五編書けば、君も一人前になるだろう」とはげました挿話。自分の晩年の小説『ブヴァールとペキュシェ』のなかで使う自然描写のためにはことさらこの若い弟子に命じてノルマンディー海岸の実地調査をさせ、指導したという話もよく知られている。

モーパッサンの作家経歴で、はっきり目につくことが二つある。その主な創作活動の時期がわずか十年間(1880-1890)であったことと、この短期間に約三百編という中・短編小説を書いた、ということだ。日本では小説には短編形式が多いが、ヨーロッパでは短篇小説専門の作家というのはごく少ない。モーパッサンやチエホフはそういう少ない作家なのだ。モーパッサンは長編小説も幾編か書いているけれど、誰が見てもその本領はやはり短編や中編によく発揮されている。わかりやすくいえば巧みな人生のスケッチ画家だ。自然主義文学時代によくいわれた《人生の断面》式の構図によって、地方の農民や漁夫の生態、またはパリの小市民のみみっちい生活を鮮明な文章で活写し、ごくわかりやすい人生のアイロニーやペーソスで味つけしたこの人の短編小説は、ときにはそれがきわめて常識的な裁断法ではあるが、いつもスッキリした小気味のよさをもっている。

また、モーパッサンが特に日本で愛読され、親しまれた理由の一つに、この作家がもっている自然感情、自然の風物にしめした愛着やそれを描く詩情のことを誰しもあげる。この人は、師匠のフロベールとちがって、元来その生活態度に《自然児》風なところがあり、自然を大そう愛した人であった。どの作品にもそういう詩情がにじみ出ている。フロベールの小説にも、『ボヴァリー夫人』にも、美しい自然描写は豊富であるが、多くの場合ただ自然風景を描いているのではなくて、人物の心理を比喩的に説明するに役立っているのである。これに反し、モーパッサンの場合はもっと素朴にじかに自然そのものが描かれている。作者がそのものとして愛している。モーパッサンの小説といえば、動物的な性欲描写が相当多いというので、そういうたちの文学だと思われていたことさえあったが、じっさいは性欲描写の書き方も、多くの場合は淡彩風で、あっさりしていて執拗なものではけっしてない。

『女の一生』(Une Vie)は三十三歳のときの作品である。長編小説の第一作である。さきにも一言したように、モーパッサンはバルザックやスタンダールのように、またフロベールのように、長編小説にすぐれた力量を示した人ではなかった。全体の構成力、ドラマの集中化、人物心理の鋭い個性的な把握、そうした点ではむしろ凡才

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

である。その人生観においても、やはり《自然児》タイプの性格が反映していて、彼の作品に一貫している厭世思想といえどもフロベールのそれのような複雑なものをもっていない。単純、単調である。『女の一生』からくみとれる思想や倫理も、やはりそうした単純なものなのである。しかし、同じように女の結婚生活の不幸をえがいた小説ではあっても、『ボヴァリー夫人』より女の生活そのものの描写ということでは、いっそう綿密な描法になっていると思う。フロベールの小説でも主人公の娘時代から、夫になる男への淡い思慕、結婚、夫婦生活の幻滅、妊娠、出産と同じような生活相がくりひろげられて行くが、『女の一生』のジャンヌのほうでは新婚生活や妊娠やごく初歩的な性生活のことや、家庭や親族間の日常的な事柄がことこまかにとりいれられ叙述されているのだ。以前にはよく問題にされたジャンヌの初夜の経験のえがき方も、今日では問題にならないが、当時としてはずいぶん大胆な書き方だったわけである。しかも、エマの場合とちがって、こちらの方は、母と娘と子、三代にわたる家庭生活が書かれている。周知のように原名は Une vie（人生）であるのを、わが国では英訳題名にしたがってはやくから『女の一生』という呼称で通っているが、たしかにこれは女の一生である。『ボヴァリー夫人』の解説のところでいったように、エマの生き方にはただ女というより人間一般の夢と現実の相克図が感じられるのだが、ジャンヌの生きかたからは、今日の読者から見れば古い型すぎるだろうが、女らしい、この時代の女の生活だけにありそうな悲しい現実が多く感じられるようだ。

『ボヴァリー夫人』には相当はげしいドラマチックの要素がある。作者はそれを意識的にもり上げて行く。こちらでは女主人公の生活がいつも受身の姿勢におかれていて、ドラマがない。ティボーデによれば、エマは《意志》の欠けた女性だというが、しかしこのジャンヌほどには欠けてはいない。周囲に配置された副人物のありかたでも、フロベールの場合は薬剤師とか司祭とか、その他かなり誇張された典型人物がすえられ、整頓されていて、作品の劇的構成を助けているが、『女の一生』にはそういう技巧的な引きしめはなく、全体がいわば流れのリズムで運命的なものを感じさせる。やはりこういう点は一八六〇年以後の自然主義派らしい作品なのである。

『女の一生』に劇的なものが欠けていることについては、中村光夫氏もこういっている。

「エマがともかくある生活を築き、生きる意識の過剰から死をえらんだに対して、ジャンヌははじめから生きる能力をもたず、人生から何ひとつ自分のものをえられないところに、彼女の悲劇があるといえばあるのです。彼女と人生とのあいだには、劇を生むにたる交渉すらないのです……」

私もこれに同感である。むかしこの小説が世間で誤解されていたころは、女の生活、特に性生活をよほど露骨に書いた小説と思われていたらしいが、じっさいには物たりぬくらいに大そう清浄な感じの作品である。官能描写の得意な小説家のようにいわれるモーパッサンがこの中でヒロインとして描いている女性は、ほとんど官能も欲望ももたないような印象をあたえる。フロイド的にいえば粗暴な、感受性のとぼしい男性と結婚したために、彼女に一生の精神的外傷のようなものをあたえたのか。この点大へん感覚的で、官能のよろこびに敏感なエマと対照的だ。毒をあおって死ぬエマの不幸と、両親と子供への愛情以外に何一つ知らず、その子供にも裏切られ、「人生はいいものでもわるいものでもない」と洩らす女中と二人でわびしく生きながらえるジャンヌと、この両方の人生ともに現実へのきびしい抗議がふくまれていることは疑えないが、そのどちらの人生により多くの共感や同情をもたれるか、それは読者の読後印象としておきたい。とにかく、『ボヴァリー夫人』と『女の一生』は十九世紀後半以後においてたびたび書かれた家庭の女性の不幸をテーマにした小説シリーズを大きくひらいた扉なのである。

昭和三十三年十一月

生島遼一

目次

女の一生……新庄嘉章訳……一三
ボヴァリー夫人……生島遼一訳……二五

女の一生

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co